

子どもの自然体験を対象とする生活記録の研究—小学校4年生A子の日記分析を基に—

A Study of Children's Nature Experiences through the Analysis of Life Documents

- Focus on Elementary School 4th Grade Children's Diary -

木村 学

KIMURA Manabu

文京学院大学 人間学部 児童発達学科

[要約] 子どもの日記に綴られた文章には、生き物とのかかわりや草花とのふれあいなど、自然とかわる子どもたちのいまここにある生が刻銘に記されている。子どもたちが日々の出来事を綴った日記を研究対象として分析することによって、子どもの自然体験の在り様を、行動的な側面や情意的な側面などから包括的に捉えることはできないだろうか。そこで本稿では、年間を通して継続的に綴られる小学生の日記に注目し、日記に描かれている自然とのかかわりを抽出し分析を試みた。分析の結果、A子の自然体験は学校の授業や、クラスの仲間との活動、家族との活動を契機として展開され、A子の生活全体の中でそれら活動は印象深い出来事であると考えられる。また日記に綴られている内容の多くは、日常の身の回りの出来事や気づきであり、社会教育の領域で提供されるような子どもキャンプなどの体験は見られなかった。このことは、今日の自然体験における家庭間の格差が指摘される現在において、学校生活や授業展開によっては、多様な自然体験を保障できることが示唆された。

[キーワード] 生活記録 日記 自然体験

1. はじめに

子どもの日記に綴られた文章には、生き物とのかかわりや草花とのふれあいなど、自然とかわる子どもたちのいまここにある生が刻銘に記されている。子どもたちが日々の出来事を綴った日記を研究対象として分析することによって、子どもの自然体験の在り様を、行動的な側面や情意的な側面などから包括的に捉えることはできないだろうか。

これまでの子どもの自然体験を対象とする調査方法としては、参与観察法やインタビュー法、アンケート法などをあげることができよう。例えば、イディス・コップによる伝記的分析¹⁾や、SLE研究²⁾などにおいては、子ども時代の自然体験を回想した記憶に基づいたデータを収集し分析することによって、人間形成としての自然体験の重要性や環境行動に繋がる原体験の重要性が指摘されている。このような個人への通時的な視点からの調査・分析は、自然体験という子ども

の活動と教育効果の因果関係等を説明する際には有効ではあろう。

一方で、個人々のいまここの生活世界を捉える共時的な視点としては、いかなる調査方法が可能であろうか。例えば筆者は、参与観察法によって学校ビオトープにおける子どもの自然遊びの様子を捉えようと試み、ある時期の子ども集団のトンボ捕りの様子を調査し、そのダイナミクスを描き出すことができた³⁾。しかしこの調査・分析では、参与観察の回数が限定的であるため、子ども集団の自然遊びに対して、観察調査前後の様子を捉えることができず、自然遊びの全体像を捉えるための十分なデータ記録とはならなかった。

そこで本稿では、年間を通して継続的に綴られる小学生の日記に注目し、そこに描かれている自然とのかかわりを抽出し分析を試みることによって、現在の子どもの自然体験の現状を明らかにしたい。

2. 生活記録研究の意義

筆者はこれまで、子どもの自然体験を考察するために、子ども文化の創造を焦点に検討を行ってきた。なぜなら子どもたちは自然とかかわる生き物の捕獲や飼育などの場面において、試行錯誤を繰り返し創意工夫を生み出す経験によって独自の文化を創造してきたからであり、そこに人間形成の土台が培われると考えられるためである。そして、こうした自然とかかわる子ども文化の創造は、市井の自然遊びが喪失している現在、学校教育にこそ再生の可能性があるのではないかという視点で検討を行ってきた。

学級における子ども文化の創造という視点から子どもの自然体験を分析・考察するためには、子どもたちと実践者の日々の活動とその際の自然に対する価値変容を継続的に示すデータが必要となる。そこで、子どもたちと日々の学級生活を書き綴ってきた小学校教諭・大楽光明の学級通信の実践を、学級文化創造の手がかりとして分析を試みてきた。大楽の2006年度の学級通信を資料として、生き物に関する言葉を全て抜粋し、ドキュメント分析を行った結果、学級通信には、カマキリ、ヤモリ、コオロギ等の捕獲や飼育をめぐる子どもたちの言葉や、それに呼応する教師の言葉が掲載されており、子どもと教師の物語生成として構想される自然体験の在り方が示された⁴⁾。

上記の学級通信実践は教師の編集によるものであるが、掲載されている記事内容の多くは、子どもたち自身の生活記録という日記によって構成されている。日々の日記というものは、過去や現在の生活の際立った側面を振り返る助けとなるものであり⁵⁾、これら個々人の日記を分析することによって、子どもたちの経験したその日の印象深い出来事として、自然体験の特徴が把握できるのではないかと考えられる。

筆者は別稿において、小学校3年生のN君の日記(312日分)について分析を試みている⁶⁾。自然とのかかわりが記録されている日記75日分を抽出し分析した結果、N君の自然体験の特徴として以下のことが示された。①多様な動物や植物と

触れ合っている。②家庭における活動が多い。③クラスの友だちとの活動が多い。④異年齢集団の遊びがない。⑤学校の先生との情報交換が豊富にある。⑥直接的な体験だけでなく、間接的体験、想像的体験も多い。この結果から、現代社会の都会の子どもであっても、学級担任の絶えざる働きかけによって、身の回りの日常生活を舞台とした豊かな自然体験が展開されていることが示唆された。そしてこの追調査として、より多様な子どもたちの事例分析が必要であると考えられた。

そこで本稿では、同じ学級担任の児童であった小学校4年生A子の日記に注目した。

3. 研究手続き

A子の日記の概略は表1の通りである。まず日記を書くきっかけとなったのは、学級担任からの提出の要求があったためである。しかし必ずしも提出が義務付けられているわけではない。

日記を書く内容についての制限はなく、自由に日々の出来事が綴られている。書かれた日記は、本人を含め担任や家族の人が読み手となり、担任からは毎回、赤ペンによるコメントが書き入れられる。

そして、子どもたちの日記の記事は、しばしば担任から本人の了解を得て学級通信に本人の名前と共に掲載されることがある。子どもたちの多くが、こうした日記を書きコメントをもらうという日々の活動に積極的に取り組んでいる。以下、本稿では、日記に見られる誤字、誤表現はそのまま原文の通りに記載する。

表1 A子の日記の概略

きっかけ	: 提出の義務付け
書き手	: 本人
読み手	: 本人, 担任教師, 家族
内容	: その日の出来事, 個人の内面
公表の有無	: 学級通信に掲載(秘匿性なし)

4. 結果

表2 A子の一年間の日記の概略

回数	日付	日記の内容
1	4/7	弟の入学
2	4/9	弟との通学
3	4/14	自分の誕生日
4	4/16	友だち家族とのイチゴ狩り
5	4/20	ピアノのレッスン
6	4/23	おばあちゃん家でカレーライス
7	4/24	タンポポコーヒーを飲む
8	4/26	遠足で川遊び
9	5/1	授業で小松菜パーティー
10	5/2	誕生日パーティー
11	5/3	友だちの犬
12	5/4	おるすばん
13	5/5	日記を書く心得
14	5/6	「祝日」について調べた
15	5/8	虹を見た
16	5/9	日本舞踊を習っていること
17	5/10	母の日
18	5/12	懐かしい写真
19	5/14	図工
20	5/16	ドクダミを調べた
21	5/17	髪の毛を切った
22	5/19	土曜日にディズニーランドに行く
23	5/20	おばあちゃんの誕生日
24	5/23	青空給食
25	5/26	本を借りた
26	5/28	ティッシュ
27	6/1	本を借りた
28	6/3	偏頭痛
29	6/5	学童でカードを作った
30	6/6	運動会の前日
31	6/10	ディズニーランドに行きたい
32	6/17	アリの群れを見つけた
33	6/19	いとこの子
34	6/23	ぶり照り
35	6/25	かぶと虫
36	6/27	お父さんに怒られた
37	7/3	学童でドッチボール
38	7/4	いも掘り
39	7/5	おいもの味
40	7/7	教室のザリガニ
41	7/9	私が生まれた日
42	7/10	お母さん
43	8/26	弟
44	9/1	学級会
45	9/3	体の動き
46	9/24	中華料理屋に行った
47	9/30	おやつのプリン
48	10/13	言葉遊び
49	11/4	もう冬か
50	11/6	学校の帰り
51	11/9	もうすぐピアノの発表会
52	11/12	友だちの誕生日
53	11/17	今日は雨
54	11/18	放課後すくすくスクール
55	11/19	クイズ
56	11/20	キャラクターの絵
57	11/21	長野県に行った
58	11/22	七並べ
59	11/23	先生へのプレゼント
60	11/25	キャラクターの絵
61	11/26	スケート教室

62	11/27	火曜日は遊び
63	12/1	ポートボール
64	12/2	すごろく
65	12/4	親子集会
66	12/7	道路に気を付けて
67	12/9	もうすぐクリスマス
68	12/10	クリスマス
69	12/11	とびばこ
70	12/15	二重跳び
71	12/16	クリスマスプレゼント
72	12/17	休み時間に男子と遊ぶ
73	12/18	とび箱で8段跳ぶ
74	12/20	スケート
75	12/22	好きなアニメ
76	12/25	明日から冬休み
77	1/11	三学期
78	1/12	転入生
80	1/13	書き初め金賞
81	1/14	書き初め
82	1/15	チーズホンデュー
83	1/18	星座の観察
84	1/21	明日はリコーダーフェスティバル
85	1/25	弟が熱
86	1/27	ひょうたん工作
87	1/28	とび箱で足が痛い
88	1/29	入院の友だちに手紙を書く
89	1/30	学校公開
90	2/2	七輪でもちを焼く
91	2/3	雪合戦
92	2/4	友だちの退院
93	2/5	バレンタインデー
94	2/8	友だちの名前
95	2/9	転校した友だち
96	2/16	クイズ
97	2/17	転校
98	2/18	クイズの答え
99	2/21	ピアノの発表会
100	2/22	サクラの冬芽
101	2/23	友だちのポケット
102	2/24	もうすぐ花が咲く
103	2/25	さくら
104	2/26	人が生まれる「詩」
105	3/1	カエルの交尾
106	3/2	えんぴつのF
107	3/3	えんぴつを買う
108	3/4	カエルのたまご
109	3/8	弟の成長
110	3/9	最後の学級会
111	3/10	漢字の読み方
112	3/12	けんだま
113	3/16	漢字テスト
114	3/17	遊んで転んだ
115	3/18	サクラの葉が出た
116	3/19	明日から千葉のおばあちゃん家に行く
117	3/20	星が見えた
118	3/21	お母さんの誕生日
119	3/23	最後の日記

(*網かけは、自然とのかかわりが記載されている記事)

表2は、A子が一年間に綴った119日の日記全てを整理したものである。日記に付けられたタイトルと内容に基づいて、「動植物」、「自然現象」、「自然をフィールドとする活動」について書かれているものを、A子の自然体験として抽出し網掛けで示した。その結果、26の日記を自然体験を示す記事として抽出した。

A子の自然体験の特徴として、表3のように「授業における体験」、「放課後における体験」、「家庭における体験」と分類することができる。以下、それぞれの特徴を示す日記の文面を見てみよう。

表3 A子の自然体験の特徴

①授業における体験	
4/24	タンポポコーヒーを飲む
5/1	授業で小松菜パーティー
7/7	教室のザリガニ
2/22	サクラの冬芽
2/24	もうすぐ花が咲く
2/25	さくら
3/18	サクラの葉が出た
②放課後における体験	
5/8	虹を見た
5/16	ドクダミを調べた
6/17	アリの群れを見つけた
11/4	もう冬か
11/17	今日は雨
1/27	ひょうたん工作
2/3	雪合戦
3/1	カエルの交尾
3/4	カエルのたまご
3/20	星が見えた
③家庭における体験	
4/16	友だち家族とのイチゴ狩り
5/3	友だちの犬
6/25	かぶと虫
7/4	いも掘り
7/5	おいもの味
11/26	スケート教室
12/20	スケート
1/18	星座の観察

①授業における体験

5月1日「小松菜パーティー」 今日、自分達で育てた小松菜でおひたしを作りました。小松菜をゆでて、切ってお皿にのせて、ごま、かつおぶし、しょうゆをかけて食べました。あっという間にみんなで食べてしまいました。私は一人、一つつつ小皿で食べるより大きい皿でみんなでとりあいっこしながら食べる方がおいしく感じます。おいしかったです。中には一人で一皿とって食べてる人がいました。だんだんなくなってくると、ほとんどとりあいっこになりかけていました。さい後のさい後までみんなでとりあいっこしながら食べました。(原文のママ)

5月1日の日記には、授業中にみんなで育てた地元の野菜である小松菜を調理して食べたことが書かれている。クラスの仲間と大皿から競い合うように食べたことが印象的だったようである。

このような授業実践の他にもA子のクラスでは、授業中にタンポポコーヒーというタンポポの根を使ったコーヒーを飲んでみたり、サクラの冬芽をペットボトルに入れて栽培し観察を行ったりという多様な体験が教師から提案されていることが分かる。

そしてこうした授業内における体験の延長上に、放課後に様々な体験を行っていることが分かる。例えば、以下の5月16日と6月17日の日記は、身近な日常生活の出来事について書かれたものである。

②放課後における体験

5月16日 「ドクダミ」 ふだん、通りにさいている「ドクダミ」という花。ふしぎな形をしていて花びらはふつう、でも、中心の花ふんみみたいな所は、上にふくらんでいるというか、なんというか……。なにかふしぎなかんじだったからいちおう、しらべて見たけどなんだかよくわからなかった。ざんねん。

6月17日 「あり……。」 今日帰り道、ありのむれ(?)を見つけました。そしたらなんと！ ありがダンゴ虫をかついで自分達の、巣にはこびこんでいるではありませんか！！？こわいですね。私が虫じゃなくて、よかったですね。そしたら、ちがう、生きている虫がやってきました。すると、ありは自分の巣にはこびおえた虫をあとにして、その虫に目をやりました。そしてあり達は、その虫にとびかかり、おおいかぶさっているいろいろな所をかじりまわります。がんばれ！まけるな！といっしょうけん明、見てました。でも、勝利はあり達です。そのいけにえの虫はありの強さにまけたというか、ありの数にまけた。といった方がいいでしょう。ああ……。ざんねんな、へんな虫……。ありとは、こんなにこわい生き物だとは……。(原文のママ)

A子は5月16日の日記に、日頃から目にしていたであろうドクダミの花について観察したことを書いている。A子はこのような一見すると見過ごしてしまいそうな草花にも目を向けており、それ以外にも、雨や虹そして星などの自然現象にも日常的に目を向けていることが分かる。そして観察した事柄についても、6月17日のアリの群れについての日記のように詳細に観察が行われていることが分かる。このような観察力と文章化のスキルは、日々の日記を付ける習慣によって獲得されるものと解釈できる。

以上の授業内の体験や放課後の体験の他にも、家庭における体験について綴られた日記も多い。

③家庭における体験

3月20日 「星が見えた」 今日千葉につきました。来た時北斗七星、オリオン座ははっきりと見えました。空気がきれいでよく見えました。写真を取りたかったのですがよくうつりませ

んでした。おばあちゃん家は山のおくで光がありませんのできれいに見えただと思います。

家族との活動では、授業や放課後の体験と比べて、非日常的な体験が行われていることが分かる。例えば、3月20日の日記には、千葉県の田舎の祖母の家に行き星を観察した感動について書かれている。東京の都会の環境と比較して、田舎の方が光が少なく星の観察が可能であるという気が記されている。この他の日記にも家族と一緒にイチゴ狩りに行ったことや、いも掘りに行ったことなどが綴られている。

5. 考察

子どもの生活記録を調査対象とする本稿の日記分析によって、子どもの自然体験をどのように捉える事が出来たのであろうか。まず学校内と学校外の子どもの様子を連続的に包括的に調査対象とすることができたと言える。したがってこれまで子どもの体験の一側面しか捉えられなかった調査研究に対して、自然体験の実態の全体像を明らかにすることができたと言えよう。

A子の日記からA子の生活の全体像を見渡すならば、A子の自然体験は学校の授業やクラスの仲間との活動、放課後の活動や家族との活動が多く、A子の生活全体の中でそれら活動は印象深い出来事であると考えられる。

また日記に綴られている内容の多くは、前述のN君の自然体験と同様に、日常の身の回りの出来事や気づきであり、社会教育の領域で提供されるような子どもキャンプなどの体験は見られなかった。このことは、今日の自然体験における家庭間の格差が指摘される現在において、学校生活や授業展開によっては、多様な自然体験を保障することが示唆されたといえよう。

従って、A子の担任教師のような日記を活用した生活綴方の教育実践によって、子どもたちの体験活動が促進され、子どもたちの生活に大きな影響を与えることが可能だと言えよう。

6. おわりに

最後に、本稿の事例と類似した実践が戦前の生活綴方の実践において蓄積されていることについて確認しておきたい。例えば戦前の「調べた綴り方」と呼ばれる実践においては、従来の綴り方が主観的、個人的、観念的、感情的であったという批判から脱却し、客観的、集団的、現実的、理知的な綴り方へと前進しようとする科学的な綴り方実践として展開された⁷⁾。

そして戦後の実践においても、70年代頃には学級担任の裁量というよりも教育委員会の方針として展開された「せんせい、あのね」というフレーズで語りかける子どもの日記の実践が広まっていた⁸⁾。実践者である鹿島は、日記を書くという実践を通して子どもたちの書く力だけでなく、生活に目を向ける観察力がついていくのだという⁹⁾。

これらの実践に見られるような子どもたちの生活と教育活動を繋ぐ教育実践を、生活記録という調査データとして今後更なる調査研究が求められるであろう。近年の社会科学の研究領域においても、個々人のライフストーリーの研究が注目されているように、生活記録は生活の全体を見渡す視座となるものであり、これらの研究からは、我々人間が統制された社会の中で従順に生を営んでいるという存在ではなく、自らの生を創造して生きる存在であるということが明らかにされる¹⁰⁾。

従ってそうした主体的に生きる個人の生活記録に光を当て探究することは、子どもの自然体験の全体像を明らかにし子どもたち個々人の生活世界を理解する方法としても重要であると思われる。

今後の課題として、さらに複数の生活記録を収集し分析することが必要である。稿を改め追求したい。

引用文献

1) イデイス・コップ (1988) 子供時代における

想像力のエコロジー『自然への共鳴』第一巻 思索社 69 頁

2) 降旗信一・石坂孝喜・畠山芽生・櫃本真美代・伊東静一 (2006) Significant Life Experience (S L E) 調査の可能性と課題 環境教育 第 15 巻第 2 号 2-13 頁

3) 拙稿 (2007) 学校ビオトープにおける子どもの自然探索行動—休み時間の虫捕り遊びはいかにして展開されるか— 環境教育 第 17 巻第 1 号 53-62 頁

4) 拙稿 (2010) 大楽光明教諭による生き物をめぐる学級文化の創造—物語生成として構想される子どもの自然体験—日本環境教育学会関東支部年報 第 4 号

5) van Manen . M 1990 *Researching Lived Experience* State University of New York 70-74 頁

6) 拙稿 (2010) 子どもの自然体験—子どもの生活に根ざした自然体験を構想する— 小玉敏也・福井智紀編著『学校環境教育論』筑波書房 99-115 頁

7) 上田庄三郎 (1979) 調べた綴り方とその実践 上田庄三郎著作集 6 国土社 186-219 頁

8) 西川祐子 (2009) 日記をつづるということ—国民教育装置とその逸脱— 吉川弘文館 130-131 頁

9) 鹿島和夫 (2010) せんせい、あのね—ダックス先生のあのねちょう教育— ミネルヴァ書房 74-75 頁

10) ケン・プラマー (1991) 生活記録の社会学 光生館 28 頁

謝辞

日記という大変貴重な個人記録を、資料としてご提供していただいた A 子さんと保護者の方、及び学級担任の大楽光明教諭に、心より感謝申し上げます。